連載

サンダル履き気ままの旅 14（最終回）

◇何度でも行きたい台湾◇

寺井 融
Terai Toru

台北のアメ横と呼ばれる四平街
充実した食べ物屋にマッサージ店

何度行っても、また行きたくなるのが、台湾である。台北国際空港に着いて、すぐ台北のアメ横と呼ばれる四平街に向う。松江路と長春路が交差する六福客機（ホテル）をめざしたら分かりやすい。同ホテルの最上階には、金鳳庁という飲茶の名店もある。

四平街には、色とりどりの旗がはためく、ファッション・ストリートがある。建国市場という古いマーケットもあって、生鮮食料品が売られている。そこを抜けると、山西刀削麺之家がある。いまは看板に「日本のガイドブックで紹介された店」と大書されているので、間違えることはない。入り口に、茹だった大鍋が据えられている。

レスラーの太腿ほどに練りこねられた小麦粉の生地（切る前のウドンみたいなもの）を、包丁で削ぎ、鍋に放り込んでいく。厚いところ、薄いところがある。そのため茹でかげんが異なり、硬さが違ってくる。プリン、ツルン、ツルリ。これがたまりませんね。お薦めは、蕃茄（トマト）牛肉麺であろう。ちょっと酸味と甘味があるトマトスープが、牛肉の臭みを消していて、食欲をそそられる。

四平街の周りは、ビジネス街なのだけれど、朝鮮一人鍋の店や海老専門店・黒潮風など、食べ物屋が充実している。長春路を中山駅のほうに足を延ばすと、京鼎樓がある。あの有名な鼎泰豊から暖簾分けした店。小籠包をレンゲにとって、一口噛むと、皮の中からジューッと肉汁が出てきて、絶品である。鼎泰豊みたいに、団体観光客で席が埋まっていることも少ないので、ゆっくり食べられる。

四平街では、床屋やマッサージ店を利用するのも楽しい。腰痛と肩こりをかかえているので、台

台北市内の MRT

湾式マッサージ店に入った。地元の人が予約制でやってくる店らしかった。突然の外国人闖入者に、店員がキョトンとしている。

身振り手振りで、症状を訴える。施術者に、なかなか通じない。そうすると「どこの具合が悪いのですか」と、客のおばあさんに声をかけられた。彼女が、通訳をかって出てくれて、話は進んだ。「日本語が、お上手ですね」というと、「子供の頃は、日本人でしたもの」。〝当然〟という笑みを返してくれた。

完璧な日本語を喋る床屋店主 筆談では、「汽車」は「火車」

次は床屋の話。

「台湾に何回いらしてますか」と、丁寧な日本語で訊ねられた。

「何回も来ていますよ、台北（タイペイ）には、特にね」と答える。

「タイペイは外来語ですよ。日本人ならタイホクと言ってほしいな」と怒られてしまった。

店主は、五十歳ぐらいの戦後世代であった。でも、「好きなひばりちゃんの歌で、日本語を覚えた」というだけあって、完璧な日本語を話してくれる。台湾では、日本語を喋る人が多いのである。通じない場合でも、漢字による筆談という手もある。

ところが一度、タクシーで困った。「セントナル・ステーション」と言ったけれど、発音が悪いせいか通じない。そこで「台北駅」と紙に書いて、ドライバーに示す。けれども、首を振る。さて、弱った。

「そうだ、台北車站だ」と気づき、急ぎ書き直して、再提出してみる。「オーケー」と言われた。同じ漢字圏といっても、用語が違う場合がある。汽車と書けば、自動車のことであるし、日本でいう汽車は、火車と書く。

現在の台湾の国語は中国語（北京語）である。しかし、日常会話では台湾語（閩南語）が使われることが多い（一部では客家語や諸民族語）。戦後、大陸からやってきて人は外省人（約15％）、もともと住んでいた人は本省人と呼ばれている。本省人は台湾語を使う。本省人には、土着の非華人、高砂族ほか山岳諸民族も含まれている。いずれにせよ、文字は大陸の簡体字とは異なり、正字（繁体字）を使い、台湾のテレビをつけると、繁体字の字幕がついている。

台湾新幹線で1時間半強の高雄へ 台南に日本人・八田與一の記念館

台湾の面積は、日本の九州ぐらいである。ちょうど台北を福岡と考えれば、高雄は鹿児島にあたる。高鐵（台湾新幹線）だと、約1時間半強で行ける。南のほうが本省人の比率が高い。

高雄から南の高雄県は、台湾バナナの産地でもある。また、観光バスで、南端の恒春に行くのもよい。２００８年に台湾で大ヒットした映画「海角七号――君想う、国境の南」のロケ地である。

日本の統治が終わって、引き揚げ船の中で、日本人教師が、教え子の恋人・台湾人女性・友子に七通の手紙を書く。しかし、出さ（せ？）なかった。彼の死後、娘が投函する。ところが、台湾の地名が変わっている。さて、果たして、その手紙は旧名・友子さんに届くか…。それとともに、現代の日台男女による恋模様も描かれていて、ドラマ性あふれる作品となっている。最後の「野ばら」を合唱するシーンでは、日台の歴史に思いをはせ、涙を禁じえない人も多い筈。

台湾高鐵（新幹線）

日本統治時代といえば、台南から車で1時間くらいかかるが、烏山湖がある。日本人技師・八田與一が作った人造ダム湖である。この建設によって、嘉南平野の水利事情が大幅に改善され、農業の飛躍的な発展に寄与した。台湾では、八田氏の慰霊祭に現職総統が出席するほど、感謝されている。八田記念館もあるし、銅像もある。

戦前の教育を受けた台湾の人は、「日本人は嘘をつくな、盗むな、学校に行けの三つを教えてくれた、それを守って、台湾は発展してきたのだ」と感謝する。それも実感できるであろう。

ロングステイにお薦めの埔里 家具付きマンションが月5万円

台南は、その昔の都である。歴史的な建物も多い。人口七十万ほどの町であるから、歩いて見物するのに適している。

また、台南料理が美味しい。まずは、名物の担仔麺。小ぶりの椀に、さっとゆでた麺を入れ、ちょっと甘く感じるスープをかけて、ひき肉を盛りつける。その担仔麺発祥の店・度小月は、いつも混んでいる。また、蔣経国2代総統がお忍びで何回も通ったという阿霞飯店も有名だ。ここの子持ち蟹のぶつぎれが入った蒸しご飯は、絶品であった。

埔里市内のロングステイ・マンション

台湾でのロングステイにお薦めは、埔里（プーリー）である。高鐵台中駅からバスで四十分、人口八万の都市である。三十坪の家具付きマンションが、月一万五千元（約五万円）。常春の地で、蝶の里としても知られており、近くの町で温泉も湧いている。景勝地・日月潭や阿里山、九民族文化村も近い。何よりも水がおいしく、紹興酒の産地である。前市長で現立法委員（国会議員）の馬文良さんは、ロングステイ者の受け入れに熱心であった。日本語ボランティアも組織しており、「言葉の面の心配もなく、住みやすいところですよ」と、ロングステイ中の西澤和雄さん（七十九歳）も語っていた。余談ながら、馬議員は若くて美人である。（了）

埔里市内の商店街

※註：中大には、戦前から台湾から学びに来た学生が多い。中央大学学員日華友好会（会長・長田茂）では、毎年、友好交流事業として、台湾を訪問し、桜の植樹を行っている。

写真＝郡山貴三

■てらいとおる　昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。